

受 験 番 号

令和八年度 中学校入学試験問題

国 語 (二 次)

(時間 四十五分)

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図まで中を開いて見てはいけません。
- 二、受験番号(算用数字)を問題用紙・解答用紙のきめられた欄らんにかならず記入しなさい。
- 三、問題がぬけている、印刷がはっきりしないなどの場合は申し出なさい。
- 四、解答はかならず解答用紙のきめられた箇所かしょに記入しなさい。
- 五、何か用事のできた時には「はい」と言って手をあげなさい。ただし問題の内容についての質問をしてはいけません。

●句読点、記号は一字と数えること。

一

①～⑩の——のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。
(送りがなのある場合はそれも書くこと)

- ① 貿易船のモケイを作る。
- ② 国会でセイトウが意見を出しあった。
- ③ シンコクな米不足になる。
- ④ 今年度の委員長をツトメル。
- ⑤ 健康はかけがえのないサイサンだ。
- ⑥ アユ漁がカイキンとなる。
- ⑦ 兄はキカイ体操の選手だ。
- ⑧ 丁重にことわる。
- ⑨ 弟はピアニストの素質がある。
- ⑩ 戦国大名が城を築く。

二

ちひろさんとお母さんの会話を読んで、後の問いに答えなさい。

ちひろ 「担任の先生に年賀状を出したいから、はがきの書き方教えてくれる？」

母 「いいよ。まず文面を考えなくちゃね。最初にお正月の賀詞[※]を書いて、目上の人には、「謹賀新年」などの四文字やあいさつ文^①を入れるのがいいよ。本文には感謝や今年の抱負[※]を書き、縁起物のイラストをそえるとおめでたい感じが出て、はがきもはなやかになるよ。」

ちひろ 「なるほどね。どんなはがきを使えばいいの？」

母 「年賀はがきを使うよ。普通の郵便はがきとちがつて「年賀」というしるしが入っているよ。」

ちひろ 「いつまでに出せばいい？」

母 「年賀はがきを元旦^{たん}に届けたいなら、遅くともクリスマスまでには出す必要があるね。それから、年賀はがきは一月七日までの『松の内』に届けるのが礼儀^ぎだよ。」

ちひろ 「それを過ぎたら、はがきは出しちゃいけないの？」

母 「そんなことないよ、『松の内』を過ぎたら『寒中見舞い』として出すよ。寒中見舞いは、一月八日以降^④、立春までの間に出すあいさつ状のことだよ。」

ちひろ 「そうなんだね、ありがとう！ 書いてみるよ。」

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

図書委員である坂本文月ふづきは中学三年生。文月は親友の読山文香よみやまかみかとおたがい「フミちゃん」と呼び合っていて、二年生までは一緒に図書委員をしていた。しかし、三年生で学級委員になった文香が、同じ委員の黒木郁彦くろき いくひこと仲良くなっていることを文月は知った。そんなある日、文香と黒木の二人が「フミちゃん」「フミくん」と呼び合っているのを見てしまった。

とっさに、文香のうでを引っぱっていた。べつに、文香は黒木くんのほうへ行こうとなんてしてなかったのに、「そっちに行っちゃダメ！」とさげぶみたいに、飛びついた。

「フミちゃん」はわたししかないんだって、言ったじゃん」

おどろいてふり返った文香に、そう投げかけていた。大声は出してないはずなのに、^①のどの奥おくがさけたみたいにいたかった。

「……えっ？」

文月が強くうでを引いたせいで、文香の赤いめがねが鼻筋から少しだけずり落ちた。

フミちゃんを「フミちゃん」とよんでいいのは、わたしだけじゃなかったの？ フミちゃんが「フミちゃん」ってよぶのは、わたしだけじゃなかったの？ なんで黒木くんを「フミくん」だなんてよぶの？ 黒木くんも特別なの？ わたしとどっちが特別なの？

なんで？ ねえ、どうして？

そう聞きたかった。この^②とした感情を、友だちをとられた嫉妬しつととして、ぶちまけてしまったかった。

のどを、さげび声がせり上がってくる。文香に何かをぶつけようとしている。

何を言おうとしているのかわからないのに、「言っちゃダメだ」と思ってた。言ったら……きつと、大変なことになる。もう、今まで通り文香と友だちでいられない気がする。

^③

文香のうでをにぎりしめる自分のこのひらが、じつとりあせばんでいた。ぬるっとした感触しんかくが、自分と文香の境目を強烈に印象づけた。

文香が、息をふるわせながらこちらを見ていた。

「——フミちゃん？」

おどろいて、とまどつて、ちょっとこまりながら、文香は文月をよんだ。「フミちゃん」という、ふたりだけの特別なよびかたで。

ふたりだけの、特別だったはずのよびかたで。

「ごめん」

そう口にして、文月は彼女のうでを放した。

何も言わず、何も聞かず、その場から走ってにげた。

つぎの日、学校を休んだ。文香から「大丈夫？」とメッセージがとどいたけれど、返事ができなかった。

つぎの日も休んだ。文香からまたメッセージがとどいたけれど、読む

こともできなかつた。

気がついたら、中学最後の夏休みが始まっていた。

*

原稿用紙の最後のマス目ピッタリのところまで文章を書き終えて、文月は思わず「お、気持ちいい」と笑った。

〔 中略 〕

書きあがった感想文を、文月はカウンターで読書していた犬塚先生のもとへ持っていった。

「先生、できました」

原稿用紙を受け取った先生は、一言「がんばったね」と文月をほめた。

「夏休み初日から数えて、ついに四十本目の感想文ですね」^④

そうか、そんなに書いたのか。これまでに書いた感想文を思い返しなから、文月はため息をつくように笑った。

「楽しかったよ」

夏休みの間、大量の読書感想文を書いた。いろいろな本を読んで、自分が思ったことを言葉にした。頭が整理されて、むねが少し軽くなった。

「感想文を書いていると、自分の心がよく見えるの。それだけで楽になることがたくさんあるんだなって、よくわかった」

夏休み初日、小学校を突然たずねてきた文月を、犬塚先生は図書室に入れてくれた。「三週間くらい学校に行っていないんだ」と打ち明けたけ

れど、先生はそれ以上何も聞いてこなかった。学校で何があったかも、受験生なのにこれからどうするつもりなのかも。

「夏休みの間、好きだけ図書室に来ていいですよ」と言ってくれた先生の言葉にあまえて、毎日図書室に来た。家にいると両親の心配がいたいほど伝わってきて居心地が悪かったから。

でも、図書室にいとどうしたって文香のことを考えてしまう。この場所ですくさんの時間をすごしたから、ふとした瞬間にむねが苦しくなって、心臓が^⑤とちこちこまる。

このままじゃ、苦しさに飲みこまれる。

そう思って、犬塚先生に自分で宣言した。

図書室を使わせてもらう代わりに、たくさん本を読んで、たくさん感想文を書いて、自分の気持ちを整理する、と。

ドロドロの感情をかかえた自分とは別人になりたいと思って、夏休みが始まって三日目に、駅の中の百円ショップで真っ赤なフレームのだてめがねと、金色のエクステを買った。[※]

坂本文月じゃなくて、陽気でお茶目でちよつと強引な——[※]へミサキちゃんシリーズのミサキみたいな、架空の女の子になった。

たったそれだけのことなのに、本当に別の自分になれた気がして、家から出られなかった数週間がうそみたいに、毎日図書室に來られた。

図書室にやってきた子たちに、あえて「フミちゃんとおよび」と言った。

（フミちゃん）という名前はもう特別でもなんでもないから、関係な

いだれかにたくさんよんでもらえばいい。そうすれば、文香が黒木くんを（フミくん）とよぶのにも、黒木くんが文香を（フミちゃん）とよぶのも、受け入れられるかも。

⑥ こんなに苦しくてあつかいにこまる（特別）なんて、こわしてしまえばいいと思った。

最初は文香以外の子に「フミちゃん」とよばれるのに違和感しかなかった。ほんのちよつと、むねもいたかった。

でも、夏の暑さがきびしくなるのに合わせて、少しずつ、なれていった。特別だと思っていた関係が変わってしまっても、こうしてちよつとずつなれていくのかも。そう思った。

「ここで書いた四十本の読書感想文がね、いつかわたしを助けてくれる気がするよ」

これは予感というより、願いだ。文月自身の身勝手な想いだ。

「本が好きで、たくさん本を読んできたけど、自分の心の中すらよくわからないし、大事な友だちの心の中もわからない。でも、読書感想文をいっぱい書いて、後輩^はにえらそうなこともいっぱい言⁷って、あとは行動するだけなんだなって思えた」

もうすぐ、夏休みは終わる。新学期が来る。

ここは小学校の図書室。わたしが通うべき場所は、ここじゃない。

「新学期から、ちゃんと学校に行く。フミちゃんと、話をする」

こわくないかと思ったら、こわい。

あの日、中学校のろうか^Aで文香にぶつけそうになった言葉の正体は、

どれだけ考えてもあいまいなままだ。文香をひとりじめしたかったのか、文香が他のだれかと仲よくなるのがいやだったのか、もつと別の感情をはきだそうとしたのか、いまだにわからない。

でも、つぎの日に⑧とした顔で「きのうはごめんね」と言えなかったのだ。言えるなら、中三の夏休みはこういう形にはならなかった。

わからないけれど、名前もつけられない感情だけれど、なかったことにできなかった。それを理解するのに、夏休みという長い時間が必要だった。たくさんの本と、たくさん読書感想文が必要だった。

それに、もうひとつ、わかったことがある。

どれだけこわくても、文香とちゃんと話さないといけない。

「坂本さんがそう決めたなら、がんばってください。こまったら、図書室へ来るといいです」

たんたん、でもおだやかな口調で犬塚先生はうなずいた。モツブ犬みたいな白髪^{はくち}と口ひげが、ほのかにオレンジ色にそまっている。

「はーい、そうします」

それじゃ、と先生に手をふって、リュックを背負って文月は図書室を出た。

ろうかは静かだった。スリッパをはいた文月のペタペタという足音が、校舎中にひびいているみたいだった。

ペタペタ、ペタペタ。

^A階段を下っていくひとりぼっちの足音に、別の音が重なった。

ペタ、ペタ……えんりよがちなスリッパをはいた足音が、一階のろう
かから聞こえてくる。

階段を下りて、文月は足を止めた。

職員室の前で、賞状やトロフィーのかざられたガラスケースをながめ
ている人がいた。

赤いフレームのめがねをかけた、綺麗な黒い髪をした女の子。小学生
のころより背も髪ものびて、初めて会ったころよりずっとずっと大人っ
ぽくなった。

「……フミちゃん」

文月の声に、彼女はハッと顔を上げる。

「フミちゃん」

彼女しか——読山文香しか口にする事のなくなったあだ名で、文月
をよぶ。

「どうして……」

「きのう、犬塚先生からうちに電話があつて、フミちゃんが図書室にい
るって」

先生の白ひげを思いうかべて、文月はふっと笑った。

リュックのストラップをにぎりしめて、文月は一歩一歩、文香に歩み
よった。文香はそんな文月の顔を、じっと見つめていた。

「そのかつこう、ミサキちゃん？」

ぎこちなく、文香が問いかけてくる。金色のエクステに指先でふれな
がら、文月はゆっくりうなずいた。

「おそろいだね」

文香が自分のめがねのフレームを指先でつつく。赤いフレームが、ま
ろやかに光った。

文香の手つきは、やっぱりどこか、ぎこちない。

「うん、いろいろ訳があつて」

「そっか」

会話はそこでとぎれてしまう。文香は明らかにこまった顔をして、ガ
ラスケースの中の賞状に視線をやった。

「なつかしいね、これ」

自分の名前が書かれた読書感想文コンクールの賞状を、指さす。

ほおに力を入れて、文月は息をすった。

「この賞状、持って帰ってなかったんだね」

たしか、文部科学大臣賞をとったあと、全校集会でみんなの前で表彰
されて、賞状は卒業まで学校にかざってもらおうということになつてい
たはずだ。

「わたしも担任の先生も、すっかりわすれちゃってたんだよね。いつか
取りにいかなきやって思ってたんだけど、いつのまにか時間がたつ
ちやつた」

「もったいない。せっかくの文部科学大臣賞だったのに」

「どんな賞だったかなんて、どうでもいいの。夏休みにふたりでいっぱ
い本を読んで感想文を書くのが楽しかったんだもん。賞も賞状もオマケ
みたいなものだから」

そこまで言って、文香はやつと肩かたの力をぬいたみたいだった。ふふつと鼻を鳴らして笑い、文月を見る。

「夏休みにいっぱい本を読んだんだけどね、やつぱり、ひとりじゃつまらないなって思った。感想を言い合う相手がいたほうが、楽しいね」

そっちは？ と文香が首をかしげる。文月は苦笑しながら、めがねとエクステを外した。

「わたしもいっぱい読んだし、読書感想文も書いたよ。小学生が図書室にけっこう遊びに来てくれてさ。だれかと本の話をするので、楽しいなって思った」

「そっか、^⑩気が合うね」

「うん、合う合う」

最後に会った日のことを、文香は聞いてこない。何がしたかったのか、何を言いたかったのか。ぜんぜん、聞いてこない。

口を開きかけたのに、言葉が出てこない。

そんな自分を、文香が見つめている。赤いフレームのめがねごしに、まばたきを二度する。

「夏休みの間、連絡連絡しなくてごめん」

先にあやまられてしまつて、文月もあわてて首を横にふる。

「わたしも、しなかった」

今度はふたりそろつてだまりこんでしまう。オレンジ色がじんわりと広がるろうかに、自分と文香の黒い影かげが落ちている。

「読書感想文」

ふいに、文香がこぼした。

「読書感想文がね、まだ、終わってないんだ」

まゆ毛を八の字にして、こまり顔で文香は笑う。

まさか、フミちゃんにかぎってそんなわけがない。

そう思うのに、「うそだ」と言えない。本当に終わってないのか。沈黙もくもくをうめるためにうそをついているのか、文月にはわからなかった。

わからない。人の心なんて、ぜんぜんわからない。自分の心だって、わからないことだらけなんだから。

でも、だからこそ、知ろうと思う。理解しようとする。本のページをめくるみたいに、自分や、自分以外のだれかの心に歩みようとする。

こわいけど。すごくこわいけど、それでも、わかりたいと思う。

だから、^⑪わたしは借りるんだ、本の力を。

「しょうがない、フミちゃんが手伝つてあげるよ。わたしね、夏休みの間、後輩たちの読書感想文の救世主※だったんだよ？」

「なにそれ、どういうこと？」

「感想文を書き終わつたら、くわしく教えてあげるよ。それよりフミちゃん、なんの本で感想文書く？」

歩きだした文月の横に、文香が「どうしようかなー」とならぶ。ふたりの間には、微妙びまうなすきまがある。前までは、こうじゃなかった。

「フミちゃんは、夏休み中にどんな本を読んだの？」

文香が聞いてくる。文月は窓の外に視線を泳がせながら、ふつと笑つた。

『クジラたちの声』っていう写真集に、『空に向かって泳ぐ』っていう水泳の小説に、(ミサキちゃんシリーズ)を全巻読み返したり、あと『やまなし』と『銀河鉄道の夜』も読んだ。それに、『ドリー』の翼はプラスチック』っていう……」

「あ、わたしもそれ、読んだよ」

文月の言葉におおいかぶさるるように、文香が言う。ほんのちよつと前のめりになって。

「本当っ？ 読んだ？」

「読んだ読んだ、ドリーかわいいよね」

「わかる、ちよつと生意気なんだけど、それがいいんだよね」

さつきまでたしかにあった^⑫は、気がついたらうまっていた。きつとこれは形だけで、わたしたちの関係は、きつと前と全く同じにはもどらない。

それでも、わたしはわたしの気持ちが知りたくて、いつか答えが見えたら、フミちゃんに伝えたい。

あの雨の日にフミちゃんのををつかんだのは、こういう気持ちだったからなの、と。

文月の気持ちを文香がどう受け取ったとしても、わたしたちは、きつと大丈夫。

文香が黒木くと付き合うようなことがあったとしても、わたしたちは、きつと大丈夫。

「フミちゃん」というわたしたちの特別なつながりがなくなっちゃって、

きつと、新しいつながりを作っていける。

今はとりあえず、形だけでも以前と変わらずにしようと思えることが、文香も同じように思っていることが、単純にうれしい。

スリッパをはいたたどどしい足音が、ふたり分。笑い合うみたい
に、夕日の差すろうかにひびいていた。

『読書感想文が終わらない！』額賀滂(ポプラ社)

※だてめがね…実際にはかける必要がないのに、外見をかざるためにかけるめがね。

※エクステ…エクステンションの略。自分の髪の毛につなげること
で、髪が長くなったようにみせることができる毛の束のこと。

※(ミサキちゃんシリーズ)のミサキ

…自己主張のできるミサキがクラスメイトのかかえる問題を解決していく物語の主人公。赤いめがねと金色のエクステが特徴。

※救世主…苦しい場面から脱出できるようにつくってくれた人。

問一 —— ①はどのようなことを表していますか。最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

ア うそをつかれた怒りが体中を駆けめぐったこと。

イ 文香を身体全体で思いつきりひっぱったこと。

ウ 身体の一部が傷つくようにつらかったこと。

エ 置き去りにされて二人をにくく思ったこと。

オ のどを痛めるぐらい大声を出したこと。

問二 ②、⑤、⑧に当てはまる言葉を、次よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア ケロツ イ ひやつ ウ キリツ

エ ドロツ オ バタツ カ ギョツ

問三 ③に当てはまる文月の様子を表現した一文として、最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

いものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 空を見上げて、まばたきをくり返した。

イ 息を飲んで、奥歯を思いきりかみしめた。

ウ ゆっくり片耳をふさいで、一歩後ろにさがった。

エ 体をゆらしながら、口をとがらせた。

オ 地面を見つめながら、足で空気をかけた。

問四 —— ④とありますが、文月が四十本の読書感想文を書いたのはなぜですか。本文中の言葉を使って十五字以内で答えなさい。

問五 —— ⑥とはどのようなことを表していますか。最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 〈フミちゃん〉と呼ぶ人はみんな図書室が好きだという、思いこみを断ち切ること。

イ 〈フミちゃん〉と呼ぶのは黒木くんだけという、二人の安心できる関係から離れること。

ウ 〈フミちゃん〉と呼ぶのは文香だけという、二人だけの呼び方へのこだわりを捨てること。

エ 〈フミちゃん〉と呼ぶのは小学生の後輩しかいないという、みじめな状況から逃げること。

オ 〈フミちゃん〉と呼ぶ人はもう誰もいないという、ふてくされた気持ちをやめること。

問六 —— ⑦とありますが、それは文月にとって具体的にどうするこ

とですか。本文中の言葉を使って十五字以上二十字以内で答えなさい。

問七 —— ⑨とありますが、文月はどのような先生の姿を思い浮かべたのですか。最もよいものを次よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 読書感想文の内容をきびしく指導してくれた先生。

イ 後輩との関係を相談して細かく面倒をみてくれた先生。

ウ 親との関係を心配して話しかけてくれた先生。

エ 読む本に迷っている自分におすすみを紹介してくれた先生。

オ 自分が決めたことを聞いて後押ししてくれた先生。

問八 —— ⑩と同じ意味を表す表現「が合う」のに当てはまる動物を漢字一字で答えなさい。

問九 —— ⑪とありますが、文月は何をしようとしたのですか。次の文のに当てはまる内容を、本文中より二十字以内でぬき出しなさい。

文月は本の力を借りてとした。

問十 ⑫に当てはまる言葉をこれより前の本文中から六字でぬき出しなさい。

問十一 —— A・Bの「足音」について、次のようにまとめました。に当てはまる内容を考えて一行で説明しなさい。

Aではひとりぼっちからぬけ出したという文月と、声をかけて伸びるをしようという文香の気持ちが表示されており、Bでは二人ともという気持ちが表示されていて、「足音」の違いが二人の気持ちの変化と重なっている。

④ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

僕が初めて研究したのは、小鳥が餌場で鳴く声だった。

シジュウカラなら「チヂチヂ」、コガラなら「ディーディー」。誰かがまいたヒマワリの種やピーナッツ、たくさん実った木の実など、まつまつた餌を見つけると、激しく繰り返し鳴くのである。「餌場に仲間を呼ぶために鳴いているのでは？」と、見当はつけていたものの、本当のところはどうなのだろうか。

これに気づいたのは冬である。冬といえは、小鳥にとつては食べ物の枯渇する厳しい季節。カラ類の大好きなイモムシは姿を消し、草の種や木の実も争奪戦だ。そんな時、ヒマワリの種を見つけたら、^①柵からボタモチどころじゃないだろう。宝くじが当たったようなものである。他の鳥に食べられぬうちに、独り占めする方がよさそうなのに、^②みんなを呼ぶなんてこと、本当にするのだろうか？

リチャード・ドーキンス (Richard Dawkins) 博士の著した『利己的な遺伝子』にもあるように、生き物というのは原則として、自身の利益を最大化するように行動すると考えられている。自分の得になるように利己的にふるまう個体の方が、自分を犠牲にして他者を助ける利他的な個体よりも、よりたくさんの子を残すだろう。そうすると必然的に、利己的な性質 (遺伝子) を持つ個体の方が、長い進化の歴史の中で多数派になるといえる。

③ 餌を見つけて鳴くというのは、利己的な遺伝子の考え方と矛盾して

いるようにも思える。考えれば考えるほど摩訶不思議なこの事態。これは調べてみるしかない。

そういうわけで、大学四年の十月下旬、僕は軽井沢の森に戻ってきた。^④鳥たちが混群を作り始める季節である。

今回の研究は、卒業研究のテーマを兼ねていた。卒業研究とは、大学四年時に何か一つのテーマに取り組み、論文にまとめて提出する課題である。大学四年の秋にもなると、講義や実習はほとんどないので、僕は全精神をこの研究に向けていた。

卒業論文の提出は二月上旬。データを集められるのは一月末までとあったところだ。初めての研究なので、何が起るかわからない。とにかくできるだけ長く森に通えた方がよいだろうと考えて、三か月一人で軽井沢に滞在することにした。

「リゾート地の軽井沢に三か月って、一体いくらかかるんだ？」なんて思われるかもしれないが、心配ご無用。実は当時、一泊五百円で泊まれる大学の山荘があったのだ。一泊五百円なので一か月一万五千円。三か月いても四万五千円と、破格中の破格である。築五十余年の木造平屋。風呂なし、シャワーなし、インターネットももちろんなし。野ネズミたちが自由に出入りする隙間だらけの山荘が、僕の生活の拠点になった。

さて、まずは前回の観察が正しかったか確かめなくてはならない。森の中の適当な切り株に、ヒマワリの種を入れた餌皿を置いてみる。今回

はマイクやレコーダーも持ってきた。切り株から三メートルほど離れた位置にセットして、そこからさらに七〜八メートル離れた場所から観察することにした。餌皿から僕までは十メートル。この距離であれば警戒されまい。

しばらくすると、混群が近づいてきた。八か月ぶりの再会である。⑤「果たして餌皿に気づくだろうか？」と観察を続けていると、一羽の小鳥が餌皿に向かって飛んできた。

コガラである。ヒマワリの種に気づくやいなや、餌皿の方を見ながら「ディーディーディー」と鳴き出した。そして、一〜二分鳴き続けると、今度はコガラ二羽とシジュウカラ一羽がやってきた。すると、第一発見者のコガラは鳴くのをやめ、ようやくヒマワリの種を一粒とった。「前に見たのと同じだ！」と瞬時にわかった。湧き上がる興奮を抑え込みつつ観察を続けると、他の鳥たちも次々に集まり、どんどんにぎやかになってきた。十分ほどするとヤマガラやゴジュウカラまでやってきて、入れ替わり立ち替わり、次々に餌皿からヒマワリの種を運んでいく。

よくよく観察してみると、その場で種を食べる鳥もいれば、殻を割って中身を取り出し、木の幹や倒木の下に隠しているものもある。食べきれなかった種を保存（貯食）しているのだ。

僕はコガラの鳴き声を録音しつつ、餌をとったタイミングや他の鳥たちが集まってきた順番などをできるだけ詳しく記録していった。そして、二十分ほど経った頃、数十粒はあったヒマワリの種はすべてなくなり、群れもどこかへ去っていった。

やはり、混群の仲間を呼ぶために鳴いているように思える。とにかく観察数を増やしていこう。

僕は、餌皿を置く↓観察する↓片づける、また別の場所に行き、餌皿を置く↓観察する↓片づけるという単純作業を⑥繰り返すことにした。これで、鳴き声の意味に迫れるかもしれない。

——約二か月もの間、僕はこの実験を繰り返した。すると、いくつかのパターンがみえてきた。

まずいえるのは、餌を見つけた時に出す声は、それぞれの鳥の種類で決まっているということだ。以前から観察していた通り、コガラは「ディーディー」と鳴くし、シジュウカラは「チヂチヂ」と鳴く。その声が森に響くと、他の鳥たちが次々と集まってきて、みなでヒマワリの種をついばみ始める。さらに実験を繰り返すと、ヤマガラにも同じような声があることに気がついた。ヤマガラの場合は「ニーニー」と鳴き、群れを餌場に導く。

さらに興味深いことにも気がついた。鳴き声を出すのは、多くの場合、一羽で餌を発見した時なのだ。すでに餌場に他の鳥が集まっている時や、偶然他の鳥たちと同時に餌場に来た時には、こうした声はほとんど出さない。つまり、鳥たちは、まだ群れの仲間がヒマワリの種の存在に気づいていない時にだけ鳴くようなのだ。そして、他の鳥が餌皿の近くまで集まると、鳴くのをやめて、ようやくヒマワリの種をつつき始める。

やはり、仲間を集めるための鳴き声なのだろう……。

だが、まだ結論を急いではないけない。別の可能性も考えられる。たとえば、コガラの「ディーディー」やシジュウカラの「ヂヂヂヂ」は、「集まれ」という意味ではなく、「こつちに来るな！」という意味かもしれない。見つけた餌を独り占めしようと、必死に鳴いているのかもしれないからだ。

こうした可能性を検証するにはどうしたらよいだろうか？

アイデアはすぐに浮かんだ。録音した鳴き声をスピーカーから流してやって、それを聞いた鳥たちの反応を調べてみればよいのである。

もし「集まれ」という意味であれば、鳴き声を聞いた鳥たちはスピーカーに近づいてくるだろう。一方で、「こつちに来るな！」という意味ならば、その場から離れていくかもしれないし、少なくとも、近づいてくることはないはずだ。

⑧ 僕は録音した鳴き声を編集して、いくつかの音声ファイルを作った。コガラの「ディーディー」、シジュウカラの「ヂヂヂヂ」、ヤマガラの「ニーニー」など、それぞれの鳥の声を自然な頻度で繰り返し返した六十秒の音声ファイルだ。そして、スピーカーを森の中の適当な木に設置して、それらの音声を流してみた。

⑨ ヒマワリの種はまかずに、スピーカーから鳴き声を流すだけにした。鳴き声を聞かせる前に、鳥たちが集まってしまうのを防ぐためだ。

音声を流すとすぐに鳥たちが集まってきた。コガラの声を流した時は、コガラだけでなくシジュウカラやヤマガラまで集まってきた。シジュウカラやヤマガラの声にも、同種だけでなく他種の鳥たちまで寄ってくる。一方で、鳴き声を流さなかった実験や、混群に入らない鳥（ホオジロ）の声を聞かせた場合は、鳥たちはまったく集まっていなかった。「やっぱり、仲間を呼ぶ声なんだ。人間の言葉でいうところの、

『⑩』という意味になっている！』と僕は思った。

あとは実験を繰り返し返し、統計学的な結論を導くだけである。僕は各種の音声ファイルをそれぞれ二十回ずつ流し、合計一〇〇回の実験をおこなった。

こうした実験を通して、コガラの「ディーディー」、シジュウカラの「ヂヂヂヂ」、ヤマガラの「ニーニー」は、すべて「⑩」という意味になっていることが、やっとわかった。

当時、シジュウカラの「ヂヂヂヂ」を「警戒の声」として紹介している図鑑もあつたが、その意味を科学的に確かめた研究は一つもなかった。それが今回、きちんと観察し、実験を試みることで、本当は「⑩」という意味だとわかったのだ。「ひよっとしたら世界中で僕だけがシジュウカラたちの言葉を正しく理解できているのかもしれない」と特別な気持ちになった。

①
それでは、そもそもどうしてカラ類は、せつかく見つけた餌を独り占めせず、親切にも仲間たちに教えてやるのだろうか？

ヒントはヒマワリの種を食べる鳥たちの「頭の動き」にあった。小鳥たちは種をつつく時、かなり頻繁まばに空を見上げる。種をツンツンし、頭を上げて、またツンツンしたらすぐに空を確認するといった具合だ。実はこの動き、タカなどの天敵てんてきを警戒しているのだと考えられている。木々が葉を落とす秋から冬は、天敵てんてきの猛禽類まうちゅうえいから見つかりやすい。常に空を見張らないと、いつ襲おそわれるかわからないのだ。

いろいろな動物で、同種どうしゆの他個体と群れることで、この警戒時間を減らすことができるという報告があった。混群こんぐんの中のカラ類の場合はどうだろうか？ そう思い、カラ類がヒマワリの種をつつく時に何回頭を上げるのか数えてみることにした。

シジュウカラもコガラもヤマガラも、一羽でヒマワリの種をつつく時は一分あたり七十〜八十回くらい空を確認することがわかった。一方、混群こんぐんの仲間たちと一緒にいる時は、その回数は四十〜五十回ほどまで落ちる。警戒時間が減るので、それだけヒマワリの種をつつくことができている。どの種類においてもこの傾向はともよく似ていた。つまり、鳥たちは混群をなして餌を食べることで、お互いたがに警戒行動を分担できるようになのだ。

それに、警戒の分担だけでなく、多くの目があることで、天敵てんてきの襲来しゅうらいにより早く気づくこともできるだろう。誰かがタカに気づきさえすれば、「ヒヒヒ！」の合図で、みんなで草木の茂みみぎへと逃げられる。

だから、シジュウカラたちはヒマワリを見つけたら他の鳥たちに教えるのである。僕は、ようやく鳥の気持ちがあわかった気がしてうれしくなった。餌場に他の鳥まで呼ぶなんて一見すると利他的に見えるが、実は自分にも利益があるのだ。『利己的な遺伝子』^②の考え方も矛盾はしない。

コガラの「ディーディー」、シジュウカラの「ヂヂヂヂ」、ヤマガラの「ニーニー」。これらはすべて仲間を呼ぶための鳴き声だ。そしてこの声は、群れの中で安心して餌を食べる上でも重要な鳴き声なのだ。これが、僕が初めて特定した鳥語であった。

『僕には鳥の言葉がわかる』すずき としたか 鈴木俊貴（小学館）

※カラ類：シジュウカラ、コガラ、ヤマガラ、ヒガラ、ゴジュウカラ
など、名前に「カラ」とつく小鳥のこと。

※混群：異なる種類の鳥が、一つの群れとなって行動すること。ここでは、「カラ類」を中心に、コゲラやアカゲラ、アオゲラといったキツツキ類まで加わって、大きな群れをなしている集団のこと。

※前回の観察：これより前の部分で、筆者が大学三年の冬、軽井沢でカラ類の混群と出会い、ヒマワリの種がまかれた場所でコガラが鳴いており、混群の仲間を呼ぶために鳴いたと筆者は考えた。さらに、カラ類がどんな状況きょうきょうでどんな鳴き声を出すのかに注目して観察し、カラ類の鳴

き声の種類が多いことに筆者は気づいた。

※猛禽類：肉食で性質の荒々しい大形の鳥の総称。

問一 —— ①のように、「から」という形のことわざ

があります。次のに当てはまる言葉を、それぞれひらがなで答えなさい。

ア 二階から イ からこまが出る

問二 ②、④、⑥に当てはまる言葉を、次よりそれ

ぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア せめて イ ひたすら ウ あえて
エ まったく オ ちようど カ まるで

問三 —— ③とありますが、それはなぜですか。最もよいものを次

り選び、記号で答えなさい。なお、「矛盾する」は「話の前後がくいちがっている」という意味です。

ア 自分が鳴くことによって多くの敵を呼び寄せてしまうことは、「利己的な遺伝子」の考え方としてはかえって自然な行動だから。

イ 自分が鳴いても他の仲間が餌の場所にたどり着けないので、自分たちの餌がなくなることはないから。

ウ 餌の近くで自分の存在をまわりに知らせるように鳴くことで、群れのリーダーになろうとしているから。

エ 見つけた餌を仲間と教えると自分が食べられる量が減ってしまう、「利己的な遺伝子」の考え方に反するように見えるから。

オ 鳥は人間に見つけてもらうために群れごとに鳴いているので、遺伝子の話とは無関係だから。

問四 —— ⑤とありますが、餌皿に気づいて集まってきた鳥たちの行

動をまとめて表現している一文を、本文中より探してはじめての五字をぬき出しなさい。

問五 — ⑦について、筆者は二つのことを挙げています。ヒマワリの種を見つけた時に出す鳴き声が鳥の種類ごとに決まっていることと、もう一つは何ですか。次の文の [] に当てはまる内容を、本文中より二十五字以内でぬき出さない。

[] 時にだけ鳴くことが多いこと。

問六 — ⑧とありますが、筆者は何のためにこのようなことを行っただのですか。本文中の言葉を使って、三十五字以内で答えなさい。

問七 — ⑨のような筆者の判断は、どのようなことに基づいていますか。最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 実験場所を少しづつ変えていき、予想外の結果が出て、広い視野をもって分析すること。

イ 人工的なものを使うと、間違った結果が出やすくなるので、自然のものだけを使って調べること。

ウ 短時間で結果を出すために、できるだけ条件を限定したうえで、あえて悪条件のもとで実験をして回数自体を減らすこと。

エ 自然環境を壊すことは許されないもので、今の環境を維持しながら実験結果を集められるようにすること。

オ 複数の条件を使って実験すると、何が結果に影響したのかわからなくなるので、調べたい特定の条件のみを使うこと。

問八 [] ⑩に共通して当てはまる言葉を、本文中より三字でぬき出さない。ただし、三か所とも同じ言葉が入ります。

問九 — ⑪の答えは、「混群の状態で餌を食べることで、 [] こと」だと筆者は述べています。 [] に当てはまるものを、次より二つ選び、記号で答えなさい。

ア お互いに警戒行動を分担することができる

イ みんなのいる草木の茂みへと餌を移動させることができる

ウ 天敵が来たことに早く気づき、合図を出すことができる

エ 餌をつつき合う時間を大幅に短くすることができる

オ 何度も頭を上げていち早く天敵を見つけることができる

問十 — ⑫とはどのような考え方なのか、次のようにまとめました。

[] I [] II [] III に当てはまる内容を、それぞれ本文中より指示にしたがってぬき出さない。ただし、 [] III は、はじめと終わりの五字を書くこと。

生き物は、 [] I (三字) というよりも [] II (三字) に行動するものであり、その結果、 [] III (四十字以内) という考え方。

問十一 この文章の表現の特徴として、最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 鳥の様子を擬音語や擬態語を使って表現し、読者に強い印象を持たせ、感情に訴えかけるように描かれている。

イ 筆者の感情や意見はまったく書かれておらず、実験からわかった事実を順序立てて説明している。

ウ 実験結果の値をもとに、他の研究者の考え方について批判的な視点でとらえる構成となっている。

エ 研究を通じて筆者自身が感じたことや発見の過程について、生き生きとした表現で描かれている。

オ 結論を先に書き、そこに至る過程を科学的な根拠に基づいて、論理的に説明していく構成となっている。

